



今月の主な目次

- 清水町における アルファルファ栽培の取り組み
- 草地の冬枯れ対策
- 豊富編・高泌乳牛は草づくりから
- 北見編・牛舎改造による個体乳量の改善
- 平成11年産粗飼料の成分値の傾向について

時の話題

魅力ある ぶん尿処理をめざして!

ぶん尿処理は経営上の大きな課題となっています

搾乳牛は、牛乳とぶん尿を毎日、毎日、産出します。育成牛や乾乳牛、そして肉用牛は、乳は出しますが、ぶん尿は毎日かならず産出します。これらのぶん尿を、経営上の重要な資源と捉える人と、じゃまもの・やっかいものと捉える人とは、経営上、大きな差がついてきます。今後は、前者のスタンスで課題解決にあたりたいものです。

ぶん尿には、お金がかかっています

牛に与えたエサは、消化・利用され、残りがぶん尿として排せつされます。エサの消化性は、可消化養分総量(TDN)で示され、乳牛用配合飼料では七〇〜七五%、自給飼料では六〇〜七〇%程度と考えられ、給与ポリウムでは、これらの逆数、二五〜四〇%がぶん尿に回ったこととなります。

乳配も自給飼料(購入粗飼料)も、経営上は飼料費に金額合算されており、その三〇%程度は、ぶん尿に回ったと見てよく、半端な金額(原価)でないことがわかります。

ぶん尿の価値を落とさないために

排せつされた直後のぶん尿が、栄養的に優れることは、一概に喜べることはありません。むしろ、

る、その前段では、エサの利用効率をいかに高められるかに集中すべきです。一方、排せつされたあとのぶん尿は、その扱いひとつで、その価値は低減の方向に向かい、ひどい場合は、環境への汚染源にもなってしまうます。『野づみや素掘り』の改善が必要なのもそのためです。

前段でのエサの利用効率の改善と、ぶん尿の発酵効率の改善の双方に役立つ資材として、当社では、微生物混合飼料(スノーエックス)を取り扱っています。

微生物混合飼料ですから、給与量も極少量です。牛体の消化管はもとより、牛床・堆肥舎、そして圃場へと、その増殖・定着が進み、有用微生物の循環系が形成されてゆきます。

こうなりますと、牛舎も堆肥舎も堆肥も、嫌な臭いがしなくなります。勿論、この間、エサの利用効率も改善されています。これが、私達の提案する、魅力あるぶん尿処理の流れです。

ぶん尿(堆肥)の商品価値を高める

品質の良い堆肥が圃場へ還元されますが、面積に対し飼養頭数が多い場合、システム化された商品としての販売が得策です。北研では、『寒高冷地型沃野』を開発し、モデル実践を行っています。興味のある方はぜひお出かけ下さい。

(研究本部長 山下 太郎)